

ソーシャルワーク・スーパービジョンの発展過程とわが国の現状と課題

Development process and problem of social work supervision

朝倉 由衣
Yui Asakura

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 現代社会研究専攻 修士課程

キーワード : ソーシャルワーク・スーパービジョン, ソーシャルワーク実習, 実習指導者

Key words : Development process and problem of social work supervision

1. 研究目的

本研究は、社会福祉専門職の一つである精神保健福祉士の養成課程における、実習スーパービジョンの方法と評価システムの開発を行うことを目的としている。我が国では、認定社会福祉士制度等が創設され、スーパービジョンの実施が制度の中核に位置づけられた。すなわち、専門性の高い社会福祉専門職の人材育成と確保に関する社会的な議論が進む中、ソーシャルワーク・スーパービジョンのあり方と、今後の発展の方向性を示すことは急務となっている。

2. 研究実施内容

初めに、実際に現場でソーシャルワーク実習指導を行っている、実習指導者に聞き取り調査を行い、その現状を把握した。

インタビュー参加者は下記の通りである。

A氏 : 精神科病院勤務 経験年数 : 11 年目

B氏 : 精神科病院勤務 経験年数 : 10 年目

C氏 : 就労継続B型勤務 経験年数 : 8 年目

主な質問内容は下記の通りである。

- 各職場における実習指導体制
 - ・年間の受け入れ数・学校の種別
 - ・実習オリエンテーションの実施状況
 - ・実習プログラムの立て方
 - ・実習指導者の経験年数
- 実習スーパービジョンに関すること
 - ・時間・方法
 - ・困ったこと、感じること
 - ・気を付けていること
 - 評価方法
 - 養成校との連携
 - ・巡回指導の活かし方

・連絡の頻度・手段

・連携や指導に関して困難に感じること

以上の事柄を中心にインタビューは、約 2 時間実施し、それぞれが自由に質問に答える形で行った。

実習指導体制として、三氏全ての機関でほぼ毎年、四年制大学の他、専門学校や各種通信教育課程から受け入れを行っていた。実習生を受け入れるにあたり、機関内でマニュアルを作成し、指導者間で指導に差が出ることをないよう準備していた。

実習生個々で実習に臨むモチベーションも違っており、事前学習を提示し取り組み方によってそれを図る、国家試験に出題されるような基本的事項については、知っていることを前提としており、あえて事前学習や課題として提示をしていないというそれぞれに違いがあった。

実習開始前に実習生個人の性格や内面について、できるだけ把握するよう努めていた。個人票だけでなく、事前オリエンテーションを実施し直接会って話をする、養成校の担当教員へ連絡し、実習生個人の性格や特性等を把握していた。限られた実習期間内に、実習生個人の性格や特性をつかむことまでに時間をかけられないため、事前の情報は必要であるとのことだった。またなぜ実習生個人の内面までを把握する必要があるのかについては、実習開始後の指導を行う上で必要になってくることが明らかとなった。例えば、実習開始後の指導者との振り返りの中で、指導者側がどう実習生にはたらきかけたら良いか、実習生一人一人の言葉で表現してもらうために、指導者側の関わりを実習生それぞれで変えているというものだった。実習指導者側が実習指導者自身の期待した答えを

実習生に求めてしまっていないかと悩んだり、また実習指導者自身が思う答えと違った答えを実習生が出した時、その指導に戸惑うこともあった。実習を行う中で何を感じてほしいか、どこを見てほしいかといったアセスメント項目を視覚化して提示するのではなく、実習生自身に気づいて欲しいという思いも持っていた。

毎日の振り返りを始め、実習スーパービジョンを行うことは、実習指導者側も常に迷いながら指導していた。この指導で良かったのだろうか、他の職員に相談するが、相談しても果たしてそれで良かったのだろうかと迷い考える。一方では、そもそもソーシャルワークの特性上答えがないのだから、その実習指導も答えがないのではないかと考えていた。職場実習、職種実習で終わっているのではないかと、専門職養成で求められているソーシャルワーク実習を行えているかどうか、ソーシャルワーク、ソーシャルワーカーとして考えるとはどういうことなのかを指導者として実習生に伝えられているか、日々悩んでいることがわかった。指導に引き続き、評価においても同様のことを感じていた。実習指導者が一人で評価を行い、所属長の決裁は受けているが、そもそも評価の段階で適正に評価できているかに思い悩んでいた。何を基準とするか、専門職養成の実習の評価方法が適正に行えているか、難しさを感じていた。

実習指導も評価も実習指導者養成研修の中で学んではいる。しかし実際の実習指導を行った後に、職場内や職場外で、実習指導者自身が実習指導のスーパービジョンを受ける機会やまた指導者になった後をフォローする研修を求めている。

3. まとめと今後の課題

実習指導者三者に共通して、自身が行っている実習の指導が正しいかどうかといった思いを抱えていた。またそれを解決する方法として、職場内で、上司や先輩に相談し指導を受け、試行錯誤しながら指導にあたっていた。各社会福祉専門職の

養成にあたり、実習指導内容は提示されているものの、その内容を具体的に理解し実際の実習指導に反映させることの難しさがあることが示唆された。また、実習の中で学んで欲しいことや気づいて欲しいこと、それは一人のソーシャルワーカーとしてそれぞれの専門職の思いとして持っているが、具体的に伝えたり、視覚的に提示する方法は取っておらず、実習生自身に気づいて欲しいというものだった。しかし国家資格専門職を養成するうえでは、各国家資格養成の中で提示されている実習内容を提供し指導し、実習生に習得して頂く必要がある。実習生の学びの状態や段階に適した指導を行うためにも、実習生が実習開始時にどのような状態や段階にあるのかを把握し、ソーシャルワーク実践の内容や助言を言語化していかなければならない。

今後は、社会福祉専門職養成において提示されているシラバスを基に、具体的な実習プログラムを作成していきたいと考える。多様な実習機関がある中で、まずは医療機関に適したプログラムを作成したい。事前に明確な実習プログラムを実習生と養成校に提示することにより、事前学習をより深め、準備することも可能である。また実習プログラムがあることで、実習内容が標準化され質の担保を図ることができる。具体的なプログラムを提示することは、具体的な指導内容を提示することにも繋がる。作成したプログラムを実際の実習で使用し評価を行い、実際の現場実習で使用できるものとした。またそれと連動し、実習指導者自身が使用できる実習指導の評価システムの開発を行い、実習指導の一助とした。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1]藏野 ともみ, 朝倉 由衣, 福祉専門職の実習指導におけるスーパーバイザーが抱える課題, 人間関係学研究, 査読: 無, 18号, 2016年, p 59 ~ p 64